

## 第1回牧之原市再編計画策定委員会記録【概要】

### 1 教育長から

- 市にとって大きな計画になる
- 望ましい教育環境の整備「通いたい・通わせたい」と思わせる教育環境の整備
- 全国的な人口減少、校舎年数が経ち老朽化が進んでいる。安心・安全、学びやすく通いたい・通わせたいと思ってもらえる学校にすることがこれから進める上で大事となる。
- 魅力的な小中一貫校とはどのようなものかを協議してもらいたい。

### 2 意見交換会

- 小中一貫校の方向性について
  - ・ 小中一貫教育のよさを他に伝えられるほど十分に理解できていない。
  - ・ まずは、小学校は中学校を知り、中学校は小学校を知る。小中学校の教員同士の交流が必要ではないか。
  - ・ 小中学校が同じ狙いを持ってやることで成果が現れていくのだと思う。
  - ・ 施設が並設しているところは、今のうちから垣根をとってやってみることはできないのか。
  - ・ 小規模校の子どもは中学校に上がると友達がつくれな、なじめない等があり学校に行けない子が出てくる。小中一貫になればそれが少しは解消されるのかと思う。
  - ・ 中高一貫教育は、成り立ちや設置者が違う問題があり、なかなかできにくい。中高一貫教育をする場合は、設置者を同じにする手間を掛ける必要がある。
  - ・ 小中一貫は義務教育の見直しということがある。コストや老朽化の問題がある。市町村が小中学校のデザインを考える中でコスト面的にはできるのか。教育によるメリットはどうか。牧之原市の保護者は9年間を一貫して育ててもらいたいと思うのか。別にしたいのか。コストとよりよい教育を両方考えながらいきたい。
  - ・ 学校組合が難しい問題。御前崎、菊川が関わっている。教育の中身をどう考えるかということも意見を出していくことにはなる。
  - ・ 小中連携で今やれそうなことからやっていく
  - ・ 牧之原市としてどのような力を付けたいか。子どもや先生にどんな躓きがあるのか、解消するにはどういう仕掛けをすれば良いか、先生も子どもも保護者も地域も納得できるか、牧之原市にあったものを探っていく。

○ まちづくりと学校の視点

- 地域が学校に協力してくれている。再編後もこの関係性を引き継いでいきたい。
- 中学校の不安より、地域との関係が深い方が安心感があっていいのではないか。
- 学校と地域づくりを結びつけるのは、子育て世代以外は直接学校へ行く機会がないから難しい。
- 人口施策も含めたまちづくりと学校をどうつなげるか。立地を考えるときにもつながる。牧之原市は沿岸部に市街地がある。津波を考えると内陸にしたいところだが、生活は大変になる。
- 生活インフラを見据えた上で学校を位置づけないと定住というところまで行かない。
- 今まで牧之原が大事にしていた地域とのつながりが薄れてしまうと、学校の負担が大きくなってしまう。その辺りをどう捉えていくかということも今後重要な視点。
- 外国人が増えているので、その対策も必要。外国籍の子どもは、学校へ行かなくてもいいが、行く権利はある。その権利を行使されたら自治体は受け入れる義務がある。
- 小学校は1～2kmの範囲で最初は出来ている。中学校は3～5kmの範囲で基本的には出来上がってきている。廃校になったところから地域から人がいなくなってしまう。街づくりができない。なかなかこれからはそうはいかない。小中一貫は1～2kmは無理。そういうものから離れて新しいものを作っていく。逆に学区の呪縛から逃れて新しい視点でまちを考えていかなければいけない。
- 新しい学校でできることと、学校だけでは難しいこと。地域や保護者を含めてどうしていくかということは牧之原市にとってはとても重要なこと。

○ 安心・安全

- 病院や医療の関係で婦人科がない。子育ての病院が少ないというのが、最も指摘されている。子育て世代が安心して暮らせるようにということが大事だと思う。職場もあり、病院もあり、安心して暮らせる環境づくりが大事。
- 津波が来ない場所。